



リヤード・マッカ出張報告

イスラーム研究所長 森 伸生

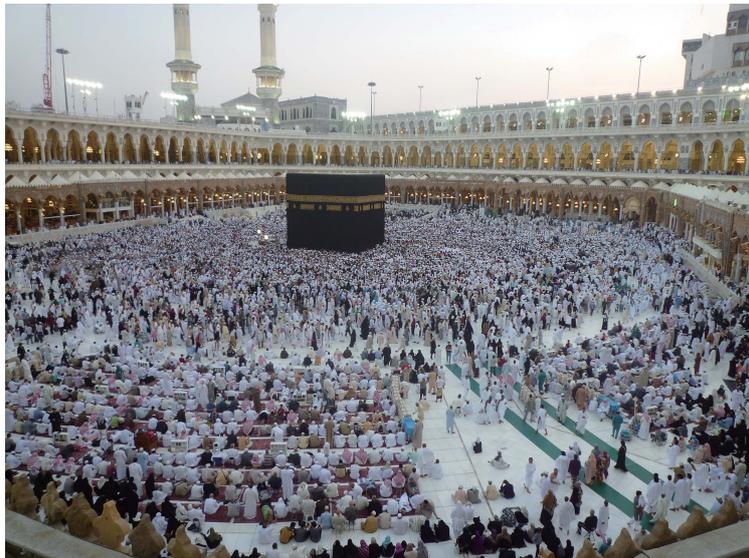
平成24年2月10日から21日にかけて、武藤英臣イスラーム研究所客員教授とともにサウジアラビアのリヤードとマッカを訪問した。今回の出張目的は、リヤードで開催されたサウジアラビア王国食品・薬品庁主催「ハラール食品に関する第一回国際会議及び同展示会」に参加すること、マッカでは私の出身校ウナムルクラ大学訪問及びマッカ市内の状況視察であった。

2月10日に成田を出発して、11日夜、リヤードに到着した。翌日から三日間、同会議に出席した。会議内容については後述する。三日目、14日の夜に在リヤード台湾大使の招待を受け、大使公邸で夕食をとりながら歓談した。台湾大使はリビアの大学を卒業後、マッカのウナムルクラ大学で博士号を取得していた。武藤客員教授とは40年来の友人である。15日、台湾大使とともにファイサル国王財団を訪問した。ファイサル家が運営し、慈善活動や文化活動にも熱心に取り組んでいる財団である。同財団が設立したファイサル国王賞は「アラブのノーベル賞」と言われるほど権威がある。そこで、事務局次長と会うことができ、イスラーム研究所の活動などを説明して、最近出版した「近現代のイスラーム（シャリーア）認識」を贈呈した。今度、出版などで計画がある場合にはファイサル財団に申請してくださいとの言葉をいただいた。

マッカ訪問

16日、マッカへ移動した。マッカでは小巡礼（ウムラ）を行った。マッカは年々ハラーム・モスク（聖モスク）が拡張されている。5年振りのマッカ訪問であったが、その変貌ぶりには驚かされた。ハラーム・モスクのそばには時計台を乗せた超高層ホテル（601メートル）が建っていた。我々はその23階の部屋に泊まることができ、

窓からハラーム・モスクを見下ろすことになった。その時計台は25キロメートル先から見る事ができる。翌日17日は金曜日で、ハラーム・モスクで金曜合同礼拝を行った。巡礼時期のような混雑であり、モスクの周りにも人があふれていた。およそ、100万人は居るであろう。



ハラーム・モスク内、カアバ聖殿

18日、私が卒業したウナムルクラ大学を訪問し、学長ならび副学長に会い、イスラーム研究所の活動などについて説明をした。研究所の研究員全員がムスリムであることに非常に興味持ち、今後も学生を派遣することを期待すると言っていた。ウナムルクラ大学卒業生の同窓会の開催などを提案したところ、大変興味を持って聞いていた。またイスラーム神学部長とも面談したが、その折、共同研究の提携など興味ある計画等がある場合には提案してくれれば高等教育省へあげ

ていくことができると語っていた。ウナムルクラ大学訪問の後、時間の許す限り、マッカ郊外のイスラーム史跡を見て回った。巡礼



ハラーム・モスクから見上げる時計台



ウンムルクラー大学学長（右から二人目）と副学長（左端）

地ミナーの谷、アラファ平原など、さらに預言者ムハンマドが啓示を受けたヒラーの山、預言者がマディーナへ移住する際に、追手から身を隠したサウルの山などである。19日、出張最後の日に、ハラーム・モスクで祈りをしてマッカを去り、ジェッダ国際空港から帰国の途についた。

今回のマッカ訪問で最も驚いたことは、ハラーム・モスクの中で自由に写真撮影ができることである。私がウンムルクラー大学で学んでいた頃、すでに30年前のことであるが、カメラを持ち込むことさえ禁じられていた。当時では考えられないことが現実になっている。イスラームは頑な姿勢を崩さないと批難されることがあるが、この現実を見ると、やはり時代の波にのり、徐々に古き慣習からの解放へと向かうのではないかと思う。しかし、昔の姿を知る者にとっては少々寂しい気もする。複雑な気持ちである。

ハラール食品に関する第一回国際会議

次にリヤードでの「ハラール食品に関する第一回国際会議」について報告する。

会議は12日午後8時半から開会式がインターコンチネンタル・ホテルに隣接するファイサル・ホールの大会場で行われた。開会式には、リヤード州知事サッターム殿下が出席していたので、会場は自動小銃を抱えた警備兵が各所に立っており、物々しい警戒態勢をとっていた。サッターム殿下の出席もあって、800人ほどの出席者で会場は埋め尽くされていた。

サッターム殿下は、「アブドラー国王の指導の下、今日、第1回食品会議が開催されることは非常に喜ばしいことであり、同会議の開催はイスラーム世界が重視する経済的問題などでサウジの重要な役割を明らかにした」との趣旨を述べ、開催の挨拶を行った。

食品庁の長官ムハンマド・ハイカル氏がセミナー開催前の記者会見で次のように同会議の趣旨を語った。「同会議に20カ国から研究者が集い討議される。討議の内容は食品管理についてである。食品管理は三レベルに分けられるが、それはトレサビリティ、製造過程の食品検査、製品の流通である。そのために我々の庁には600人の検査官が所属し、サウジの入国管理で食品検査に従事している。さらに400人を海外に派遣している。近々、同庁所属のラボを持つことになる。特に、サウジは食品を150カ国から輸入していることもあり、同庁の責務は重要である。同庁は食品について国際的な基準で検査しており、現在まで問題は生じていない。我々は現在、包

装、重金属、鉛、水銀、マイコトキシンに重点的に検査しているが、どこからも苦情は来っていない。なぜなら、検査を厳しい基準で行っているからである。」

さらに、副長官イブラヒーム・ムハイジウ氏も次のように会議の重要性について語った。「この会議はハラール食品管理に関して正確な仕様と明確な基準を定めることに努力する。第一回会議は獣医師や各分野専門や宣教師などが参加している。一年前からその発表の準備を行っていた。現在、ハラール食品の価値は毎年、900億リヤール（1SR≒21円）にもなる。会議では屠畜の方法、遺伝子組み換え食品、クローニング、ハイブリダイゼーション、ナノテクノロジーなどについて討議され、それについてのイスラーム法学的見解についても討議されることになる。」

会議での講演及び討議は2月13、14日の二日間とも、ファイサル・ホールの大会場で8時半から6時近くまで、行われた。1日に4セッションが設定され、1セッションに4人または5人の研究者が発表した。

2月13日の発表は以下の通りである。

第一セッション：

- 1 ハラール食品のイスラーム法的基準
- 2 ハラール食品輸入事務
- 3 ハラール食品の添加剤の管理
- 4 ハラール食品の製造過程の管理方法

第二セッション：

- 1 世界各国でのハラール食品証明書発行手続きの状況
- 2 ハラール証明書発行の政策と規制
- 3 ハラール食品証明書発行までのシステム
- 4 ハラール食品証明書の障害

第三セッション：

- 1 南アフリカにおけるハラール証明書の特徴
- 2 ロシアにおけるハラール製品の発展
- 3 ベトナムにおけるハラール証明書
- 4 ニュージーランド・イスラーム協会連盟の食肉ハラール証明書発行

第四セッション：

- 1 遺伝子組み換え食品の製造におけるバイオテクノロジーと遺伝子工学の役割
- 2 食品産業におけるナノテクノロジー：未来技術
- 3 豚ゼラチンについて科学とシャリーアの観点から
- 3 遺伝子組み換え食品 — 基本的なイスラーム法学的研究



セミナー風景



セミナー会場風景

- 4 食品のイスラーム法的許容性と遺伝子工学の影響
- 5 ハラル食品における遺伝子工学とナノテクノロジー

2月14日の発表は以下の通りであった。

第一セッション：

- 1 ハラル食品の文献レビュー
- 2 乳製品のいくつかの食品添加物の適法性
- 3 加工助剤成分と食品に隠された成分
- 4 ケフィア（乳製品の一つ）の健康的利点と法的疑義

第二セッション：

- 1 預言者ムハンマドの食べ物と飲み物
- 2 ベルギーのハラル食品の管理
- 3 食品のイスラーム法的管理：国家の食品管理システムの改善
- 4 非イスラーム国家からイスラーム国家へのハラル食品の輸出

第三セッション：

- 1 動物由来の宗教的な製品の市場状況
- 2 ハラル食品とコーシャ食品との違い
- 3 飼料：イスラーム法学の研究
- 4 飼料のハラルとハラーム：全体像

第四セッション：

- 1 気絶させる屠畜方法と自動屠畜方法のイスラーム法的合法性と非合法性
- 2 屠畜前に気絶させる方法とその効果
- 3 サウジにおける鶏の屠畜方法
- 4 電気ショックによる屠畜方法と自動屠畜方法
- 5 気絶させる屠畜方法の影響、政府の法的及び制度的立場
- 6 ハラル食品とイスラーム式屠畜の監督方法

以上、講演と討議の項目であるが、イスラーム法に関する講演ではほとんどが基本的な内容であり、現実的な問題にいかん解決策を見出すかと言う論議にはならなかった。第一日目、特に問題提議となった内容はイスティハーラ（「ハラーム」禁止物質から「ハラル」許容物質への変質）の問題である。例えば、豚ゼラチンは変質したと主張する学者もいるが多くの学者は反対意見である。第二日

目では、屠畜方法が多く取り上げられ、その方法として屠畜する前にスタンガン等を使用して気絶させた後に屠畜する方法や、二酸化炭素によって気絶させて屠畜する方法などが紹介されたが、いずれの方法によっても欠陥などが指摘されていた。

同会議が開催される前に、同庁の副長官が求めているような国際的な基準を導きだすには程遠いと言わざるを得ない。イスラーム法学派の見解の相違があるゆえに、一つの基準を出すことは難しいことは理解される。それはイスラーム法解釈に幅があるという理解にもなるが、一方では統一の取れないもどかしさにもなる。各国のハラル証明書発行に従事しているイスラーム団体の発表にしても、それぞれの発行の手順などを説明するだけにとどまり、イスラーム法的な基準の是非にまでつっこんだ発表をすることはなかった。やはり、基準を定めるにはイスラーム法学者による徹底した議論の末に決定する必要があるが、今回はハラル証明書発行の実務者が多く出席し、イスラーム法学者の出席は限られていた。ゆえに、同会議の最終決議は出ていない。会議担当者に最終決議について尋ねると、同庁のホームページに後ほど掲載することになると言っていたが、その実現は難しいようである。

「展示会」ではサウジの他に16カ国、全部で61ブースが出されていた。初めてのハラル展示とあって、多くの訪問客でにぎわっていた。会議の発表に集中していたので、展示会は一巡する時間しか取れなかったが、ハラル商品の紹介を訪問客に丁寧に説明する状況を見て、自社の製品がいかんハラル基準に沿っているかをアピールしているようであった。イスラーム世界で販路を拡大するためにはハラル・マークのついた製品でなければならない現状を、日本を含め非イスラーム世界の企業は認識せざるをえない。



セミナー会場風景

雲南に回族（イスラーム）村を訪ねて

拓殖大学日本文化研究所主任研究員 長谷部 茂
 同創立百年史編纂室編集委員

2011年12月31日、中国雲南省通海県の回族（イスラーム）村・納古鎮を訪ねた。これはその印象記である。

日本イスラームの先駆者・田中逸平（拓殖大学第一期生）を契機とした筆者の中国イスラーム研究は7年目を迎えた。これまでに泉州（2008年）、青島、済南（2009年）、杭州、広州（2010年）の各地を調査して回った。済南（山東省）では、田中逸平が入信した南大寺（モスク）を訪問した。中国各省に分散している回族は人口約1000万。今回は初めての内陸中国である。雲南省には50万人の回族が住んでいる。

12月26日、上海から飛行機で省都・昆明市に入った。昆明市内の回族は約4万人。私は早速、市内のモスク（清真寺）とその周辺に広がるムスリム居住区を訪ね、また昆明市イスラーム協会や雲南大学のムスリム学者から雲南回族についてのレクチャーを受けた。その成果については稿を改めて報告したい。

回族村の訪問は当初からの予定であったが、納古鎮を選んだのは、「伝統的なムスリム社会を維持している回族村」だと紹介され、しかも昆明市から110キロと近場にあったためである。

納古鎮は旧名を納家堂という。「堂」は軍営地のこと。元朝の初期、フビライが中国全土を平定した際、納という名のムスリム将軍が一族郎党を率いてここに駐屯した。彼らは兵士兼開拓農民として定住したようである。「堂」と称するムスリム居住区は、前に訪れた広州にもいくつかあった。

12月31日7時30分、昆明市南郊のバスターミナルから通海行き始発便に乗った。同じターミナルからはビエンチャン行きの直行便もある。車窓には、タイやミャンマーで見慣れた南国の景色が広がっている。違うのは、見え隠れする採石場や化学工業プラントである。どこにも開発の跡がある。雲南省が農産物、地下資源の豊富さで全国に冠たる省であることを実感した。

手持ちの地図にはごく簡単な幹線道路しか出ていない。納古鎮は昆明市一通海のルートから少し外れている。出発してもう2時間が過ぎた。乗客はぼつぼつと降車しはじめている。停車場というものはないらしい。脇道に迂回する様子もない。注意深く車窓から街並を見てみると、自動車修理店が立ち並ぶ少しにぎやかな場所を過ぎた。店の看板にはモンゴル語が併記されている。地図に「興蒙蒙古族村」とある。納古鎮のすぐそばだ。道路が枝分かれしているところでバスを降りた。乗合いバスがあると聞いたので、それらしいオンボロのマイクロバスに手を振ると止まってくれた。ともかく乗り込んで座席に腰を降ろす。乗客の中に彫りの深い顔立ちの婦人を発見する。どう見ても漢族ではない。行く先は納古鎮に違いない、と考えて少し安心した。15分ほどで四街という町で止まった。納古鎮への中継地点らしい。4元（約60円）の料金を払うとすぐに再発進。確かに目的地に進んでいることが分かって安心したためか、車窓の景色がよく目に入るようになった。建物は道の両側一列しかない。道はほとんど未舗装。壁の崩れかかったような旧家屋がほとんど。お世辞にも豊かな地域とはいえない。この時点で私は、粗末なレンガ作りのモスクと、さびれた街並みの納古鎮を予想していた。

ところが20分後、突然、目の前の視界が開けた。というより、きらびやかな4本のミナレットが現れたので、私の視線が自然と上に広がったのである。中天を指して屹立するミナレット。遠目にも30メートルはあるかと思われる。鮮やかな緑色のドームをもったモスクも見えてきた。私の予想はみごとに裏切られたのである。

桃源郷ならぬアラビアンナイトの町に迷い込んだような感じであった。バスはモスクの手前の市場の入口に着いた。馬車が行き交う。ロバが歩いている。時間は11時少し前。市場はまだ賑わって

いた。白い帽子をかぶった男性や、色とりどりのスカーフで頭をおおった女性が町を歩き来している。店の看板や路標、街角の掲示板にもアラビア語が漢字と併記されている。

バスを降り、市場の様子を伺いながらモスクの中に入った。入口は開け放たれている。人影はまばら。左手にアラビア語学校がある。そこはモスクの裏口であった。豪壮な拜殿を裏から横に抜けると拜殿前に広場がある。そこに所在無げに立っていると、横に高級乗用車が止まり、白い帽子をかぶった恰幅のいい3人の男性が降りてきた。見るからに漢族ではない。「アッサラームアライクム」。この街のことや、モスクの由来について知りたいと言うと、3人で何やら相談していたが、いちばん背の高い高齢の一人を残して他の二人は立ち去った。

私の接待係？として残ったのは馬さんであった。この村の由来を説きながら、モスクの正門を抜けて、向かいの高い塀のある建物の中に入っていき。ここも裏口で、そこから古めかしい建物の横を回ってその正面に出た。「女清真寺」とある。間口12メートルほどの立派な中国式建物である。閉ざされている扉の一面に興味のよい彩色をほどこしたアラベスク。息を呑む鮮やかさであった。馬さんの説明によれば300年前、というから18世紀初頭、清朝時代の建物である。ここが本来のモスクで、新モスク建立後に女性信者専用のモスクとしたのだという。

納古鎮のパンフレットが鎮の役所にあったはずだと、馬さんは、そこから裏門と裏口をいくつか通り抜けて村役場に連れていってくれた。歩きながらの話で、馬さんが清真寺の事務所で働いていたこと、子供が男4人女3人いて、男はすべて大学卒。うち二人はカナダに留学したという。少数民族には一人っ子政策は適用されず、進学も出国も比較的容易だとは聞いていたが、もとより豊かでなければかなわない。「この村はとてよ裕福ですね」と水を向けると、謙遜しながらも、納古鎮が鉄工業で栄えていること、村民より出稼ぎ者が多いこと、新モスクは村民の寄附だけで建立したこと等を話してくれた。農村ではなかったのだ。納古鎮は人口約8000人。うち回族が7000人を占めるという。

パンフレットは在庫がないということで、役所の人々が別の場所に電話してくれた。持ってくるのに30分かかるといので、馬さんとそこで別れ、街の散策に入った。

女清真寺が気になったので、今度は表通りを通って再び訪れた。旧市街がそこから東側に広がっている。細い路地が縦横に走っている。新モスクの周辺と違い、こちらは閑静な、というより少しうらぶれた感じの住宅街であるが、ドーム式の建物を邸内にもつ屋敷が、成功したムスリムの証であるかのように点在する。

小一時間ほどの散策を終えて鎮人民政府に戻りパンフレットを受け取ったが、納古鎮の歴史については数行の記述しかなく、馬さんの説明の方が詳しい。ただパンフレットに載っていた特産の「アラビア・ナイフ」の写真が魅力的だったので、専門店に行って小さいものを15元（200円）で購入した。

馬さんの話によれば、納古鎮のムスリムには二つの誇りがある。一つは、元朝皇帝フビライから雲南の統治を任せられたムハンマドの後裔・賽典赤（サイド・アジャル）の活躍。これは雲南回族全体の誇りであるが、もう一つは19世紀中葉、ムスリム杜文秀が清朝に対して反乱を起こし、雲南ムスリムの多くが殺された際、納古鎮のムスリムは漢族住民に守られて一人も犠牲を出さなかったことである。

納古鎮のムスリム社会は、周囲を漢族社会に囲まれ、内部に漢族を抱えながら、確かに独特の文化をもっている。基本的な社会教育がしっかり出来ているように見えた。ただ、ここを回族村の典型として見るのは早計であろう。私は迂闊にも「伝統的」に加えて「裕福な」回族村を紹介されたようだ。思えば外国人に対して「貧しく」伝統的な回族村を紹介するはずはなかったのである。



納古鎮モスク

宗教国家か市民国家か？－アラブの春に見られる二つの議論－

イスラーム研究所主任研究員 柏原良英

はじめに

今も続くアラブの騒乱は、これからのイスラーム世界におけるイスラームのありようを大きく変えていく可能性を秘めている。そんな中で、大きな議論となっているのがこれからの国家の基礎をどこに求めるかということである。各国で行われた議会選挙で、イスラーム政党の大躍進がみられる一方、それまでの独裁体制を崩壊させた民衆の中には、完全な民間による自由な西欧型の国家を求めるグループもあり、一つになって新たな国家を建設するところまでは至っていないように見受けられる。それらの考え方の根本には、自分たちのイスラームをどのように国家建設の中に生かしていくのかという問題がある。同じイスラーム政党と言ってもそれぞれのイスラームの捉え方には相違があり、必ずしも一枚岩ではないところがある。ましてや西欧型の政教分離を目指す人々にとってイスラームは国家の基礎には入れたくないものであろう。イスラーム社会の中で、イスラームの持つ意味がこれからどのように捉えられていくのかがまだまだ揺れている中で、イスラームと国家があるべき姿はなにかを考えてみたい。

1. イスラームにおける国家とは？

まず確認しておかなければならないことは、イスラームの歴史においてこのような宗教国家とか市民国家という呼び名は使われることがなかったということだ。何故ならイスラームは、宗教であり国家であり、政治、経済、社会、思想、倫理そのものであり、全ての人に対して神から送られたメッセージであるとされているからだ。そしてそれを実践するのが善を勧め悪を禁じる最良の共同体であるウンマ（イスラーム共同体）である。そこではすべての事柄が、あらゆる生活面において小さいことから大きなことまで正しいイスラームによって規定されている。この定義からするとイスラーム国家は、宗教国家と言うこともできれば、市民国家とも言える。しかし、今日一般的な市民国家という意味は、宗教を除いた国家という使われ方をしていることからあたかも宗教国家と市民国家が対立するものように見られている。本来のイスラームの考え方からすれば、それは区別されるものではないものである。

2. 二つの考えの相違の原因

今日、この二つが対立するものとして取らえられるようになった原因についていくつか考えられる。

- ① イスラーム教徒の多くがクルアーンやスンナやアラビア語に対して無知になっている。
- ② イスラーム教徒の弱体化と国家間の分裂。
- ③ イスラーム世界における西欧世界の影響力の強化。
- ④ 西欧世界からの世俗主義や民主主義や社会主義などの影響。
- ⑤ 英語の宗教という言葉「Religion」の西欧での理解の混乱がそのままイスラーム世界に持ち込まれ、それがアラビア語で宗教を意味する「ディーン」として使われたことでイスラーム本来の宗教の意味が誤解された。

特に西欧からイスラーム社会にもたらされた「Religion」は、意味が宗教儀礼や信仰に限定された意味で使われたことによる混乱が国家の呼び方に対する誤解と混乱をもたらしたと考えられる。その結果、宗教国家に対する疑いから離れようとする意識から、多くの民衆が宗教国家ではない市民国家を求めるようになってきていることは否定できない。それはアッラーが伝えた正しい宗教の意味を人々が理解していないことによる。

3. イスラームにおける宗教の意味

イスラームでは、アッラーは、各預言者を通して一つの宗教を伝えた。それはイスラームであり、それにより人々を裁き秩序を与えるとされる。それは、シャリーア（イスラーム法）であり、人々の生活のあらゆる分野における規範である。クルアーン「誠にわれは、

導きとして光明のある律法を、(ムーサーに) 下した。それで(アッラーに) 服従、帰依した預言者たちは、これによってユダヤ人を裁いた。聖職者たちや律法学者たちも(裁いた)。アッラーの啓典の護持を託されていたからである。かれらはそれに対する証人でもあった。だからあなたがたは人間を恐れず、只われを畏れなさい。僅かな代価で、われの印を売ってはならない。そしてアッラーが下されたもので裁判しない者は不信心者(カーフィル)である。」(5章44節) これは預言者ムーサー(モーゼ)を通して与えられたシャリーアである。また預言者イーサー(イエス)を通してアッラーは、同じシャリーアを伝える。「われはかれらの足跡を踏ませて、マルヤムの子イーサーを遣わし、かれ以前(に下した)律法の中にあるものを確証するために、導きと光明のある、福音をかれに授けた。これはかれ以前に下した律法への確証であり、また主を畏れる者への導きであり、訓戒である。それで福音の信者(キリスト教徒)にはアッラーがその中(福音書)に示されたものによって裁かせなさい。凡そアッラーが下されるものによらずに、裁く者は主の掟に背く者である。」(5章46、47節) そして預言者ムハンマドにも同じシャリーアがアッラーから与えられた。「われは真理によって、あなたがたに啓典を下した。それは以前にある啓典を確証し、守るためである。それでアッラーが下されるものによって、かれらの間を裁け。あなたに与えられた真理に基づき、かれらの私慾に従ってはならない。われは、あなたがた各自のために、聖い戒律と公明な道とを定めた。もしアッラーの御心なら、あなたがたを挙げて1つのウンマになされたであろう。しかし(これをされなかったのは)かれがあなたがたに与えられたものによって、あなたがたを試みられたためである。だから互いに競って善行に励め。あなたがたは挙げて、アッラーに帰るのである。その時かれは、あなたがたが論争していたことに就いて、告げられる。」(5章48節) 更に一番の元にあるものこそアッラーの教え(規則)にほかならない。「あなたがたはかれ以外の何ものにも仕えてはならないと(アッラーは)命じている。これこそ正しい教えである。だが人びとの多くは知らない。」(12章40節)

このアッラーの規則こそイスラーム国家の規則であり、これによってのみ人々の間の自由や平等や公正や信頼が十分に果たされるのである。故に、公正さをもとにしない国家も、生活の状況に目を向けない国家もイスラームの国ではないのである。

4. 何故現在統一されたイスラーム共同体ができないのか？

イスラーム教徒にとってのアッラーの規範による国家が、長い期間に渡って様々なイスラーム活動が行われているにもかかわらず、いまだに理想的なイスラーム国家の実現しない原因として次のことが考えられる。

- ① イスラーム運動の方向が派閥活動に向けられている。それにより努力が分散されている。
- ② イスラーム活動の努力が益のないものに向けられ、分裂を増加させ、多くのチャンスを無くした。
- ③ 人々の心と努力を近づけるための統一された指針がないこと。その基本には、クルアーンとスンナに法った信仰と教育があること。
- ④ ムハンマドにくだされたアッラーの指針をすべての人に伝える努力が十分にされていない。

これらの原因によりアッラーの望む真の同胞意識が引き裂かれ、イスラーム共同体の実現が阻まれているのである。

おわりに

最後にもう一度確認しておかなければならないことは、世俗国家としての市民国家は、イスラーム国家としては制度としても思想としても入り込む余地はないということである。イスラーム教徒に求められるのは、アッラーの規範に基礎を置くイスラーム国家の建設であり、その実現への呼び掛けであって、それを無視した国家はありえないということである。

第7回タフスィール公開研究会から

イスラーム研究所主任研究員 柏原良英

今年度最後のタフスィール公開研究会が2月25日(土)午後2時から文京キャンパスで行われた。今回はクルアーンの高壁章180節から最後の206節までを解説した。ここではその一部の解釈を抜き出してクルアーンのより良い理解に役立てていただきたい。

最初に語られるのはアッラーには自らを表す特別な名前があることである。それはアッラーの美名と呼ばれ、99の名前が知られている。

1. アッラーの美名について

180. 最も美しい凡ての御名はアッラーに属する。それでこれら(の御名)で、かれを呼びなさい。かれの御名を冒瀆するものは放っておきなさい。かれらはその行ったことにより報いられるであろう。

啓示の背景

一部のムスリムが礼拝で「アッラーに祈る」と言ったり、「アッラヒーム(慈悲深いお方)に祈る」と言ったり、「アッラフマーン(慈愛あまねく御方)に祈る」と言っているのを見た多神教徒たちが、彼等は唯一の主だけを崇拜すると言いつつこの二つの神に祈るとはどういうことだと非難した時に、この節が下った。つまり、これらの名前は、一つの神をあらわすもので複数の神ではないという意味。

言葉の説明

最も美しい凡ての御名：アラビア語でアル=アスマウ・アル=フスナーと言うが、アスマウは、名前(イスマ)の複数形でアルフスナーは、最も良いもの(アルアフサヌ)の女性形である。この言葉は、クルアーンでは、この章の他3か所使われている。「言うてやるがいい。「アッラーに祈れ。慈悲深い御方に祈りなさい。どの御名でかれに祈ろうとも、最も美しい御名は、かれに属する。」17勝110節、「アッラー、かれの外に神はないのである。最も美しい御名はかれに属する。」20章8節、「かれこそは、アッラーであられる。造物の主、造化の主、形態を授ける(主であり)、最も美しい御名はかれの有である。」59章24節

この名前は、アブー・ホライラの伝えるハディースに述べられる。「預言者は言われた。「アッラーには99の名前がある。それらを記憶する者は天国に入るであろう。まことに、アッラーは奇数者であられ、奇数を好まれる」(ムスリム)

アッラーには、他にはないそれらの名前の意味で最良で完璧なものがある。凡ての名前は完璧さや偉大さにおいてアッラー以外にはふさわしくない。ゆえにアッラーを賞賛する時やアッラーに何かを祈願して祈る時には、それらの名前アッラーに呼びかけなさい。

この名前は、一つ一つが独立したのではなく「名付け」で、それは自身の本質を示すものやその性質を示すものや行為の属性を示すものがある。またこれらの名は、クルアーンやハディースの中で述べられているもので、そこに無いものでアッラーを呼んではならない。呼びかけるときには、単独でも良いもの(ヤー・アッラー、ヤー・ラフマーンなど)と常に二つ並べて呼ばれるもの(ヤー・ムヒール・ヤムミート、ヤー・ダール・ヤーニーフイウなど)がある。

アフマドの編纂によるアブドゥラー・ビン・マスワードの伝えるハディースでは、アッラーの名は99に限定されない。「アッラーの使徒は「(次のように祈れば)誰も悲しみや悲嘆に襲われることはない。」とおっしゃって、言われた。「アッラーよ、私はあなたの下僕(アダム)のまたあなたの下女(イブ)の息子であるあなたの下僕です。私の前髪はあなたの手であり、あなたの決定は私に下され、あなたの裁定は公正です。私はあなたにあなたが自ら名付けた名前、あるいはあなたが啓典で降された名前、あるいはあなたが誰かに教えた名前、あるいは不可視の知識で独占的に与えた名前によって、あなたが偉大なクルアーンを私の心にとどまるように、また目の光に、またアッラー以外には悲しみや悲嘆を取り除きそれを喜びに替えることができない、悲しみの浄化に、また悲嘆の消滅にしてくださいよう祈願します。」すると「アッラーの使徒様、私たちはこの祈りを学ばなければなりませんか?」聞かれると、「はい、それを聞いた者は誰でもそれを学ぶべきです」と答えられた。」

またイブン・アラビーは彼の著書「アフカームル・アルクルアーン」で祈りのためのアッラーの名を176伝えている。

かれの御名を冒瀆するものは放っておきなさい。：真実から逸れることで、アッラーの名前から自分たちの神々の名を派生させて名付けた。例えば、ラートはアッラーからウッザーはアル・アズィーズからマナートは、アル・マンナーンなど。アラビア語でイルハードというが、もともとの意味は意図や目的から傾いたり、逸れること。この派生語としてラハド(墓の溝)があるが、これは遺体の全体をキブラに向け傾けるために掘られるところから名付けられた。

また「放っておきなさい」は、次の「報いられるであろう」という来世での罰が下されることになるから。

2. イスラーム共同体について

181. またわれが創った者の中には、真理によって(人)を導き、またそれに基づき公正に行う一団がある。

言葉の説明

一団(ウンマ)：預言者ムハンマドのウンマ(共同体)。ハディース「アッラーのみ使いは「私の共同体のグループは真理の擁護者として存続するであろう。これらの人々に敵対する者も彼等に危害を及ぼすことは出来ない。これらの人々はアッラーの御命令(死)があるまでその状態を保つであろう」と申された。」

真理によって(人)を導き：彼らは、人々を真理や善へと導く。それに基づき公正に行う：その真理によって、裁く。紛争する当事者のどちらにも傾くことなく公正に裁く。

3. その時(復活の日)について

187. かれらは(最後の審判の)時に就いて、何時それがやって来るのかとあなたに問うであろう。言うてやるがいい。「それを知る方は、只わたしの主だけである。その時(最後の審判)を知らせて下さるのはかれの外にはない。それ(時)は、天でも地でも重い(重大事となる)。全く突然あなたがたにやって来る。」かれらはあなたが、それに就いて熟知しているかのように尋ねるであろう。言うてやるがいい。「それを知る方は、唯アッラーだけである。」だが人びとの多くは分からない。

啓示の背景

かつてユダヤ人たちは、預言者に「もしあなたが預言者ならその時についていつそれが起きるのか教えてくれ」と尋ねていた。また別の伝承では、多神教徒たちがそのように聞いていたと伝える。イブン・カスィールは、彼のタフスィールで、この節はクライシュ族の人々に下されたとする。なぜならこの節はマッカ啓示であり、彼らは、その時についてそれが起きることを遠ざけたり、その存在を否定するために預言者に尋ねていた。クルアーン「それ(時)を信じない者はそれを催促するが、信仰する者は、それが真理であることを知っているので、恐れる。本当に時に就いて論議する者は、遠く迷っている者たちである。」(42章18節)

前節との関係

前節で人の寿命について語られ、その後で世界の終末であるその時(サーア)について語り、そのことに注意を喚起させる。さらにそれがいつ来るかアッラー以外に誰にもわからないことが明かされる。

解説

預言者に、マッカの人々は終末の時についてそれがいつ来るか聞く時、アッラーは預言者にその知識は、アッラーにしかなく預言者にもそばにいる天使にも分からない。それについて知識が隠されていることはそれぞれの心に重くのしかかる「それ(時)は、天でも地でも重い(重大事となる)」。また別の解釈では、それがいつやって来るか分からないために、常にその恐怖に怯えることになり、天と地の者にとって重大になる。その起きる時は突然やって来る。ハディース『最後の時』は、雌ラクダの乳をしぼっている男が、容器のへりまでそのミルクをまだしぼり切らない状態の時、突然始まる。また、衣類の売買をしている二人の男が、その商談を終えないうちに『最後の時』は始まる。更にまた、水桶をそろえている男が、まだその仕事を終えないうちに、『最後の時』は始まる」。ここではその時について2回繰り返し尋ねられる。それは最初の質問は、その起きる時間についてであり、二度目の質問はその強さや恐ろしさの度合いについての質問である。そしてそのことを知る者はすくない。それはそれを伝えるクルアーンを信じる信者だけだ。しかしそれが起きる近さについてハディース「私が遣わされたこととその時はこの二つのようなものだ。」と言って、人差し指と隣の指の間をくっつけてみせた。」クルアーン「(審判の)時の決定は、瞬き一つのようなもの。またはそれよりもっと短い(であろう)。」(10章77節)

その時が人間に明かされていないことの意義は、人間に改悛や義務や善行へと急がせることにある。

終末の前兆は3つ：(1)既に起きていることで、ユダヤ人との戦い。エルサレムとコンスタンチノーブルの開城。(2)一部は起きて、未だに続いていること。多くの紛争、多くのダジャール、多くの姦通、多くの女性の男性化、不信仰や無神論や多神の広まり。(3)時が近づいたときに現れる印。女奴隷が主人の子供を産む、裸足の羊飼いが高層の建物を競って立てる、太陽が西から昇る。

イスラーム研究所所長 森 伸生

イスラームではとくに重視しているモスクが三か所ある。マッカにある聖モスク、マディーナの預言者モスク、エルサレムのアクサー・モスクである。預言者はこの三つのモスクについて、次のように伝えている。

「聖モスクでの礼拝は10万倍に値する。私のモスク（預言者モスク）での礼拝は1千倍に値する。エルサレム（アクサー・モスクの意）での礼拝は5百倍に値する。」

これは三つのモスクのランク付けでもあるが、その場所での礼拝を奨励してのことである。次のようにも伝えている。

「三つのモスク以外に（訪問して礼拝するために）旅行をしなければならない。それらのモスクとは、この私のモスク（マディーナの預言者モスク）、マッカの聖モスク、更にエルサレムのアクサー・モスクである。」

マッカの聖モスクはサウジアラビアのマッカに存在するモスクであり、ムスリムの礼拝方向となるカアバ聖殿を中心に擁する。全世界のムスリムが一生涯に一度は巡礼に訪れる場所である。預言者モスクは預言者の町マディーナにある、はじめに預言者によって建設されたモスクである。現在、預言者の墓所、第一代カリフ・アブーバクル、第二代カリフ・ウマルの墓所が内包されている。巡礼の際には、預言者モスクを訪問するのが慣例となっている。このように聖モスク、預言者モスクについて、その所在場所に疑念を持つ者はいない。

ところが、アクサー・モスクはエルサレムに所在することは知られているが、その場所についてははっきりと示されていないのが現状である。

クルアーンの一節に次のようにある。

「われに栄光あれ。そのしもべを、（マッカの）聖なるマスジド（聖モスク）から、われが周囲を祝福した（エルサレムの）至遠のマスジド（アクサー・モスク）に、夜間、旅をさせた。わが種々の印をかれ（ムハンマド）に示すためである。」（17章1節）

預言者ムハンマドが行った夜の旅（イスラ）については詳しく、ハディースにも記されている。

「私のブラーク（天馬）が連れてこられた。それは白色で胴体が長く、ロバよりは大きいがラバよりは小さく、それについてそのひづめを視界の広さまで伸ばすことのできる動物であった。私はそれに跨がり、エルサレムの聖寺院（バイトル・マクデス）まで来た。そして私は、預言者らが使う輪にブラークをつないでから、モスク（アクサー・モスクの意）に入りニラカートの礼拝を行った。」このあとミーラージュ（昇天）の出来事、つまり七つの天を昇って行く様子が語られている。

イスラーム辞典には「アクサー・モスク」について「エルサレム旧市街の聖域ハラム・シャリーフの南に、ウマイヤ朝期に創建されたモスク。遠隔のモスクを意味し、岩のドームの南側に位置する。」と紹介されている。やはり、エルサレムを扱った他の書籍でも、アクサー・モスクについては同様の説明が行われている。

ところが、イスラーム書籍の原典をひも解いてみると、意外なことが解った。中世のイスラーム法学者イブン・タイミーヤ（1258 - 1326）がすでにその問題に答えを出していた。彼は「ファトワー全集」27巻に次のように記している。

「（第二代カリフ）ウマル・ビン・アルハッターブがアクサー・モスクの先頭にムスリムたちの礼拝所を建設した。アクサー・モスク

はそのモスク全体に対する名である。だが、一部の者たちはウマル・ビン・アルハッターブが建てた礼拝所をアクサー・モスクと呼んでいる。」

つまり、アクサー・モスクとはイスラーム辞典に示されている「ハラム・シャリーフ」のことと言える。城壁に囲まれたハラム・シャリーフ全体がアクサー・モスクとのことである。その中には、ウマイヤ朝第五代カリフ・アブドルマリク・ビン・マルワーン（在位682 - 705）の時代に建立された岩のドーム、キブラ・モスク、マルワーンの礼拝所などがある。岩のドームには、第2代カリフのウマル・イブン・ハッターブがエルサレム征服時に塵のなかから岩を発見して、そこで礼拝を行なった逸話が残っている。キブラ・モスクとはキブラであるマッカに最も近い場所として呼ばれるようになった。マルワーンの礼拝所は当時、イスラーム法学のマドラサとなっていた。そして、ユダヤ教徒によって嘆きの壁と呼ばれている壁はイスラームの伝承ではブラークの壁と呼ばれている。そこに預言者ムハンマドがブラークをつないだとされている。

アクサー・モスクは「あなたの顔を聖なるマスジドの方向に向けなさい。あなたがたはどこにいてもあなたがたの顔をキブラに向けなさい。」（2章144・145節）（624年2月頃）の啓示によってマッカのカアバ聖殿に変更になるまでキブラとなっていた。アクサー・モスクをイブン・タイミーヤの言葉どおりに理解すれば、囲い壁の中のどこで礼拝してもその価値は500倍となるということである。



- (1) キブラ・モスク (2) 黄金のドーム
(3) マルワーンの礼拝所 (4) ブラークの壁：嘆きの壁

アクサー・モスクつまり現在、ハラム・シャリーフと呼ばれる長方形の城壁に囲まれた聖域は、紀元前10世紀にソロモン王（イスラーム名：スライマーン）が建設した神殿の区域である。その神殿は第一神殿とユダヤ教徒に呼ばれている。それは後に、バビロンのネブカドネザル2世によってエルサレムが征服され、紀元前586年に神殿も破壊された。後に、バビロン捕囚からの解放後の紀元前515年に帰還民たちによってほぼ同じ場所に神殿が再建された。これは第二神殿と呼ばれている。さらに、ヘロデ王が紀元前20年に神殿の大規模な増築改修を行った。これをヘロデ神殿と呼ぶ。紀元70年にユダヤ戦争にて、ローマ軍に破壊され、嘆きの壁と呼ばれる城壁だけが残った。現在、長方形に囲んだ城壁は16世紀のオスマン帝国時代に建設されたものである。

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究所
〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14
TEL：03-3947-2419 FAX：03-3947-9416
ホームページURL: http://www.sri.takushoku-u.ac.jp

平成24年3月15日発行 第34号
発行人 拓殖大学イスラーム研究所
編集人 イスラーム研究所主任研究員
柏原 良英

拓殖大学 イスラーム研究所 ニュースレター

正統四代カリフの時代－アブーバクル（12）

（前回からの続き）

そこへアブーバクルの一族タイム家の人々がウトバのあまりの虐待の酷さを聞きつけ、アブーバクルを助けにやってきた。人だかりを押し退け、ぐったりとして全く身動きしないアブーバクルを見付け、彼を服に包み、家まで運んだ。彼らはアブーバクルがもしかしたら死ぬかもしれないと思い込んでいた。そこで、タイム家の人々はハラーム境内に戻って、ウトバを筆頭にアブーバクルを虐待した者達に向かってに言った。

「アッラーに誓って、アブーバクルが死んだならば、ウトバ・ビン・ラビアを必ず殺す。」復讐の誓いであった。ウトバは後のバドルの戦いでイスラーム教徒に殺される。

それからアブーバクルの家へ戻った。父親のアブークファーハとタイム族の人々はアブーバクルに話しかけ続けたが、アブーバクルはなかなか意識が戻らなかった。やっとなつ暮になって、口を開くことができ、「アッラーの使徒様はどうされた。」と呟いた。彼が意識を取り戻したのを見て、親族は口々に彼の無謀な行動を非難した。彼らは彼に何か飲ませてあげるように母親の女召使に言い付け、彼の部屋から出ていった。彼女がアブーバクルのもとで一人になったとき、彼に何か飲むように勧めたが、彼は「アッラーの使徒様はどうされたか？」と尋ねるだけであった。彼女は「アッラーに誓って、あなたの友についてはまったく何も知りません。」と答えた。彼は、「アルハッターブの娘のウンム・ジャミールのところに行って、彼女に私の友について尋ねなさい。」と彼女に頼んだ。ウンム・ジャミールはウマルの妹で、正式名はファーティマである。

彼女はウンム・ジャミールのところに行き、ムハンマドについて尋ねた。だが、ウンム・ジャミールは預言者とアブーバクルについて知らないふりをした。尋ねてきた女性がクライシュ族のスパイかもしれないと心配したからだ。ウンム・ジャミールは自分でアブーバクルのもとに行き、彼が殴られて重傷であるのを初めて知った。彼女は叫びながら言った。「アッラーに誓って、彼らがあなたに危害を加えたのですね。これこそ腐敗と不信の輩の仕業です。アッラーがきっと彼らに復讐されるでしょう。」

アブーバクルは「アッラーの使徒はどうされた？」と尋ねた。

「あなたの母が聞いていますよ。」

「彼女のことは心配いらぬ。」

「あのお方は無事です。」

「今、どこにいらっしゃるのだ？」

「アルアルカムの家に行っています。」

「アッラーにかけて、アッラーの使徒様のところに行くまで、私は決して飲み食いしない。」

アブーバクルは誰の勧めにも応じず、全く何も口にできなかった。彼はしばらく休んで足の痛みがやわらぎ、周りの人々もどうにか落ち着いた頃、母親とウンム・ジャミールにもたれながら家を出て、預言者のところまで行った。預言者は座り込んだアブーバクルの膝元にかがみこんで、彼にキスをした。他の者達もアブーバクルのまわりで屈みこんだ。預言者は彼に非常な哀れみを感じていた。

アブーバクルは言った。

「アッラーの使徒様、あなた様は私の両親よりも大切なお方で

す。私は大したことはありません。ただ、少し顔を痛めつけられただけです。ここに居るのは私の母で、私を心から愛しています。あなた様は祝福されるお方です。どうか、私の母をアッラーへとお誘い下さい。どうか、私の母のためにアッラーにお祈り下さい。アッラーがあなた様の祈りによって母を業火からお救い下さるに違いありません。」

アッラーの使徒は彼女のために祈り、彼女をアッラーへと誘った。そして、アブーバクルの母ウンム・アルハイルがイスラームに帰依し、真理の誓言を行なった。・・・

イスラーム布教に身命を注ぎ、迫害に絶えぬいたアブーバクルへのアッラーの恩恵は最愛なる母のイスラーム入信であった。これ以上の恩恵が他にあるだろうか。自分を生み育ててくれた母への恩に報いるのに、地獄の業火から救い出す以上のことがあろうか。これ以上の喜びが他にあるだろうか。人を愛するがゆえにイスラームを説く、これこそ布教の原点である。（次号に続く）

研究会報告

【平成23年度第6、7回タフスィール公開研究会開催】

今年度第6回目のタフスィール（クルアーン解釈）公開研究会が、平成24年1月28日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。講師は武藤英臣客員教授でクルアーン第7章高壁章155～179節を解説した。第7回目のタフスィール公開研究会は、2月25日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。講師は柏原良英イスラーム研究所主任研究員でクルアーン第7章高壁章180～206節を解説した。

محتويات العدد

- 1 . تقرير عن المؤتمر العالمي الأول للرقابة على الغذاء الحلال في الرياض
مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
- 2 . تقرير عن زيارة القرية الإسلامية في الصين
باحث أول معهد الثقافة اليابانية : شيغيرو هاسيبي
- 3 . مقالة عن الدولة الإسلامية
باحث معهد دراسات الشريعة : يوشيهيدي كاشيهارا
- 4 . تقرير عن تفسير سورة الأعراف
باحث معهد دراسات الشريعة : يوشيهيدي كاشيهارا
- 5 . مقال : مكان المسجد الأقصى
مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
- 6 . مقال : الخلفاء الراشدين (12)
مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
- 7 . أخبار المعهد: الدورتان السادسة والسابعة لدراسات التفسير (سورة الأعراف)